

京都近世の大火

近世京都の人口は、およそ35万から40万人、江戸・大坂に次ぐ第三位である。もっとも、町方人口の点では、三都ともほとんど同じぐらいの規模である。このスケールは、明治維新まであまり変化していない。

誤解をとくためにいっておきたいが、近世の京都は、日本で最大の産業都市であったということである。ちなみに、西陣機業の関連業種だけを採り上げても、その就業人口は約10万人にも及ぶのである。したがって、京都が火災を起こすと、全国的に影響を及ぼすという事態が、しばしばみられた。

ところで、京都の火災は、比較的大きなところでみると、江戸時代270年で、およそ11回ぐらいある。江戸に比較するときわめて少ないが、それでも20数年に1回ぐらいは襲っているから大変である。なかでも、近世の三大大火といわれるのは、18世紀以後に起こったもので、宝永5年(1708)3月8日に発生した「宝永の大火」、天明8年(1788)1月30日の「天明の大火」、元治元年(1864)7月19日の「元治の大火」がある。

宝永の大火は3月8日から9日にかけて焼亡したもので、市内497町に火が及び、14,000軒余の民家、100余の寺社が焼失している。この大火の経験によって、京都の防火体制は強化されることになり、とくに御所周辺の町々では新しい替地をもらって、京中の東西に分散している。京の市街地が

拡大する契機となったことでも有名である。

天明の大火は、京都1200年の歴史のなかでも、もっとも大規模な火災である。1月30日から3日間延焼し、俗に「どんぐり焼け」といわれている。御所・二条町にも火が入り、寺社の焼失238、町数で1,424町が被害をうけ、36,797軒が燃えた。当時の京都戸数が約40,800とされるから、実に90%の罹災率である。ほぼ壊滅といってもよいほど打撃を受けた。この復興に江戸幕府を代表して、松平宣信が直々の指揮をとったことは有名で、「関東之御威光」をかけて、莫大な復興資金を投入した。

幕末期の兵乱のなかで大火災が発生したのが元治の大火である。別名「鉄砲焼け」という。7月18日早朝から御所蛤御門の辺りで長州軍と禁裏防衛軍との間に戦火を交えたのが発端で火災が発生した。7月19日から21日に及んでいる。とくに二条通から南の地域にあたる大京が全滅の打撃を受け、京都全体では約65%の焼失である。焼失町数811町、家屋27,513軒、寺社203、その他寺院・塔頭・芝居小屋なども焼亡した。巨大寺院東本願寺が焼失したのもこの時である。

この元治の大火は、明治10年代まで影響を受けており、折柄の政治変革と相まって、京都は回復に大きな力を注がねばならなかった。以後120年、京都の大火は、戦争中も含めほとんどない。これははなはだ名誉なことである。

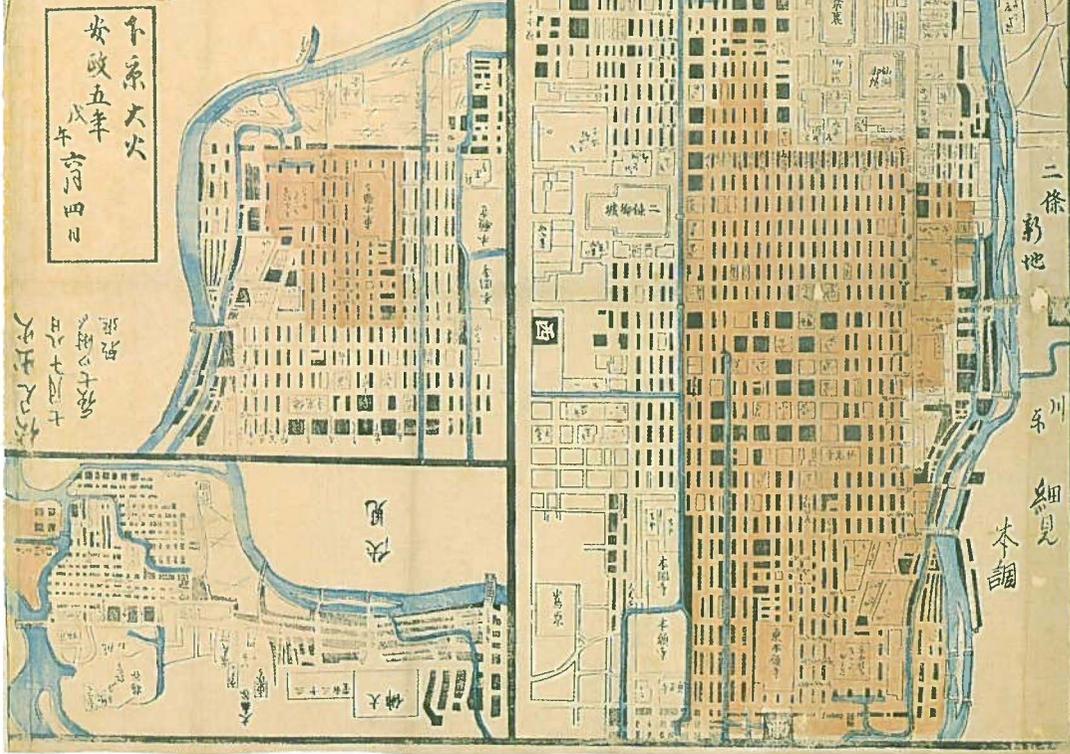
(京都市歴史資料館館長 森谷耐久)

甲 年 元 治 九

京都近世大火畧圖



下京大火
安政五年
八月十四日



二條
新地
川
細見
本調

延
保
八
年
十
月
十
七
日
火
災
起
火

伏見